

が京町家等の歴史的建造物において今なお行われ、京都を訪れる人々の姿を多く見かけることができる。人々は近世から近代、そして現在までの歴史の変遷を町並みと其中的の営みを通じて感じることができる。

イ 大都市を支えた地域に見る歴史的風致

大都市を支えている経済・業務の中心地は、町の形態や構成要素が様々に変化しながら発展していく。したがって、様々な時代の様式の建築物が混在し、また業務形態もそれぞれの時代を特徴づけるものが混在することになる。

つまり、三条通に代表されるような、近世以前から町を形成し近代以降も中心地として発展してきた場所では、京町家等の歴史的建造物が家業とともに大切に受け継がれながら、その横では近代以降の新しい様式である近代洋風建築が様々に活用されており、京都の都市の奥行きを感じることができる。



写真2-107 旧日本銀行京都支店

提供 京都市京都文化博物館



写真2-108 中京郵便局

—京郊の歴史的風致—

(1) 舟運を支えた地域

この項では、豊臣秀吉により城下町が形成され、その後舟運により発展を遂げた酒造でも知られる伏見とその周辺の地域についての歴史的風致を示していく。

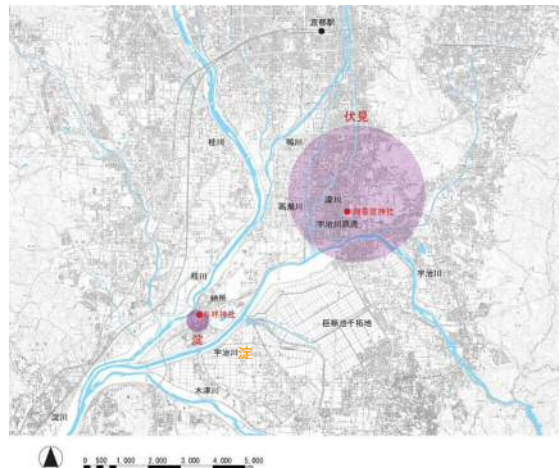


図2-64 伏見と淀

ア 伏見とその周辺の歴史

(ア) 豊臣秀吉、徳川幕府による城下町の建設

京都市の南東部に位置する伏見地域は、万葉集にも詠まれるなど、古い歴史を有する地域である。既に平安時代から淀川の舟運と陸路で京都と大阪を結ぶ物流の中継地としての役割を果たしてきた。

この伏見のまちが大きく変わったのが、豊臣秀吉による伏見城の築城と城下町の建設である。伏見の城下町の建設は、豊臣秀吉が伏見城を築いた文禄3年（1594）から始まる。城下町の建設に当たり、秀吉は伏見に水陸交通の機能を集中させるため、周辺の地形を大きく変える大土木工事に着手した。文禄3年、秀吉は直接巨椋池おぐらいけに流れ込んでいた宇治川を榎島堤によって分離北上させ、伏見城下に引き入れた。また、三栖たいこうづつみから淀に至る太閤堤を築造し、宇治川を西流させて淀川へと直結させた。

文禄5年の大地震により伏見城も城下も壊滅したため、改めて城下町が再建され、城下は、東西4km 南北6km の広大な地域に及び、基盤目状に整然と区画された。「四つ辻の四つ当たり」と呼ばれている東本願寺伏見別院前の道路のほか、城下町特有の遠見遮断や袋小路が見当たらず、またその区画のほとんどが全国六十余州の大名たち